

土佐日記の歌論性について

—和魂漢才を中心に—

姜 泰 國*

目 次

I. 序 論	2. 十二月十六—
II. 本 論	3. 十二月十七—
1. 貫之がめざしたもの	III. 結 論

I. 序 論

日本古典文學での土佐日記の位相は高いところに置かれているのは周知の通りである。土佐日記が開拓したものは、土佐日記までの意義、内容、特質などに大きな變革と展開を見せているし、それまでの日記が公的なものであったのに對して私的なものへと高められ模索的なものから文藝的なもの、そして創作活動的なものへと移行させている。その内容においては、目録的要素や近代性を導き入れ後續の女流文藝ばかりではなく、新日本文藝の多様性への提示など、文藝史的意義が大きいものとして高く評價されている。

* 人文大學 助教授

筆者はおそれ多くも、土佐日記を手にして、讀もうとしたが、開卷一聲“男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり”に出あって、先を讀み續けることができなくなって、先ずこれを究明しようとして、小論にすることができた¹⁾。讀み續けているうちに、私の胸を泣かせるものがあった、土佐日記の主題の一つである自照性の考察が試みられることができたのである。²⁾

本稿では、諸氏が認める第一主題である歌論展開であるが、その中での和魂漢才を中心に考察し、また作者である貫之がめざしたものをもふれてみたいと思うものである。

土佐日記の中には、和歌が多く詠じられているが、その中に、漢詩の引用とか、漢詩朗吟の紹介など、漢詩文の教養にふれた部分が多いのである。

その内容から見ると、漢詩の朗吟と和歌の詠作とに同時に相伴って行われた事実を指摘したものとか、句題和歌の紹介などである。

つまり漢詩朗吟の事実を報告するにとどめて、その状況を漢籍の引用によつて批評したものあり、漢詩の内容を一部分を紹介したものあり、原詩を指示せずして和歌のみを挙げたものとか、詩歌の感動的發想に關して、日本と唐の共通性を論じたものなど、約8日條に出ている。

筆者は、先づ作者のめざしたものについて諸學者の意見の相異點を考察して、貫之の意圖を定立させ、次に、日條を追つて吟味しながら考察して行こうと思うものである。

諸學者つまり偏狹な一部日本國粹論者たちは、土佐日記を土佐日記自體だけの内容を純粹に見ようとしないうで、古今東西の假名序などをひきあいに出して、土佐日記における貫之の和歌觀を、漢詩と對等とか、漢詩の排撃とか、和歌の優越性とかを主張しているのである。

後天的な人格構成の過程で獲得した知識によつて、思考したり創作活動をしている者にとつて、その知識を捨てるとか、排撃することはとても出来ないわざである。それがたとえ外國文藝とか文化の場合も同じである。自國のものより先驅的であったり、優れている場合なおさらである。外國のものを受容しながら、それを消化して、それによつて自國のものを、より深く、廣く、厚くさせて、なお重層的に、並存的に取り入れていく民族だけに、より多様な文化の發展をきたしているのである。

筆者は、千年も前に生きた人間として、これらの問題に悩み、そしてそういう問題を模索している貫之の姿に目を追つて見たいのである。そして土佐日記を純粹に土佐日記として、すなわちその内容を吟味しながら諸學者の意見をも謹聽し、さらに検討しながら、貫之がめざしたものは、まことに何かを考察するつもりである。

1) 姜泰國「土佐日記-考察」濟州大學校 論文集 第18輯, 1984.

2) 姜泰國「土佐日記の自照性について」濟州大學校 論文集 第22輯, 1986.

Ⅱ. 本 論

1. 貫之がめざしたもの

「土佐日記」の作者、紀貫之の生没年は明確ではないのである。諸研究家の推定説を参考にすると、生年は平安時代の初期、貞観八年（866年）ないし貞観十年（868年）前後であるのが通説になっている。没年は天慶八年（945年）で、享年七十八才前後ではないかと推定されている。

貫之の幼時は業平、敏行、有常という當代屈指の歌人グループに囲まれて育ったのである。彼らは惟喬親王を中心とする反攝關藤原氏のグループでもあつた。このグループを中心に、遍照、素性、行平らにまでひろがる歌人たちに接することができた貫之には、和歌へのめざめもその時期であろうことも理解されるものである。

その上、曾祖父興道と有常とか雅楽頭を歴職し、貫之自身内教坊阿古層の幼名から祭知されるごとく、歌舞音曲に縁の深い血筋であつたし、大納言船守以事の武藝の門風、さらに、紀氏一門に数多い漢學者や能書家の影響、など各種の要素が貫之の和歌への開眼にあずかつて、それぞれに大きな意味を持っていたものと思われる³⁾。

幼年貫之の周邊を形づくつたグループは、傳統的は和歌の國風を復興することによつて國體意識をあきらかに證明することにし、攝關藤原氏の一家のみ政權を獨占してはいけないことを政官界に徹底しようという。復古維新の文化政策を推し進めていたのである。

この精神は、菅原道真が指導者となつて平安初期千年の間、科擧の制度のためにする漢詩文全盤の陰に、男子貴族知識層にはほとんど無縁のものとなつていた和歌の詠作を急速に奨励することとなり、こたるとにろで歌合が盛んに催された。この歌合開催は積極的な創作活動への参加と批評意識の養成を誘うものであつたのである。

寛平（889～894年）年間は貴族社會に和歌再唱の氣運がみなぎっていた。貫之20代の青年客氣に満ちた時期であつた、宇多、道眞ラインの和歌再唱の文化政策に隨順して攝關藤原氏の專制をはね返し、人才登庸の機會をつかんで紀氏の回興を夢見たのである。久松潛一は。

「恐らくこれが青年貫之の最大の希望であつたに違いない、しかしながら貫之に天賦の歌才がそれほど豊かに備つていたとは考えられない、貫之の和歌文學への志向は、幼少年期の有常、業平グループによる環境の刺激と青年期におけるこの和歌再唱の時流への順應と多分に後天的なものであつたと考えられる」⁴⁾

3) 久松潛一 責任編集「増補新版日本文學史」(中古), 至文堂, 昭和56年, p. 262.

4) 久松潛一; 前掲書, p. 263.

と述べている如く貫之は宇多天皇の意志にであつた天皇親政の形を保つて、和歌再唱の文化政策をいつそう推進されることを頼みの綱としてひたすら和歌文學の世界に身を立てようと努めたと思われるのである。

延喜初年(910年)貫之は「續萬葉集」の編纂、「古今和歌集」の編纂などに重要な役割を果している。彼は理論的知識、和文の文章力、着實な根氣の持ち主であった。これら編纂事業の中核として役割を果し、その業績によつて和壇の第一人者の名聲を確立している。「土佐日記」は、六十も半ばを超えた歌人、歌學者として名聲があつても知遇の人たちが相ついでこの世を去ることなど重なりあつた不幸と非運の中に立たされた彼の心中は、どうであつただろうか。こうした嘆きと悲しみ、憤りなどすべてが反映されているものと考えられるである。以上のことを合わせて和歌初學入門書であると久松潜一氏は次の如く述べている。

「貫之が七十年の経験によつて得たあらゆる歌學上の理念を戯曲的に構成されたそれぞれの場において、數多くの性格に分身した登場人物の口をかりて、具體的にわかりやすくかつ興味深く説明する和歌初學入門書として…」⁵⁾

と提示しているように、土佐日記の狙いの一つは、權文の子弟のために個人用教科書として著作し、獻呈した和歌初學入門書としての性格が強いつと感ぜられるのである。というのはひんばんに出てくる歌論への言及、平明で興味本位は説明、戯曲的は構成、童心の世界などが、そのことを證明しているように思われるのである。

この歌論的要素はただ偶然に多量に含まれているのではなく、それが互いに前後照應する形で配置されていたり、反復學習の方式をとつてくり返し叙述されているのである。また歌學のすべての部門にゆきわたる體系的なバランスが保たれていた。さらにそうした歌論を展開するために戯構脚色が加えていたり、年少讀者に對する行き届いた配慮が見られるなど、多分に構成された必然性のものであるところの、歌論展開の主題性を認めざるを得ないのである。

今井勝氏は“貫之の眞の狙いはなんであつたのか”と問い、さらに單に新しく「ひらがな」による日記文學あるいは紀行文學というジャンルの創設であつたらうか、更にもう一つ別の狙いがあつたように思える”と疑問を投げながら自から答えて述べている。氏によれば、「古今和歌集序」などに述べた「和歌の心」をはじめとする自分の歌論などをまとめて、それも自らの手で書き残したい、この氣持が働いたのではないかと述べ、さらに、彼が一番傳えたい「和歌の心」は當時の制度では傳えることは不可能なものでなかつたのかそれを何よりも恐れていた、そこで貫之は「和歌の心」

5) 久松潜一：前掲書，p. 269.

を正しく傳之るのが妥當ではあるまいか、そして有名な歌人の歌論としても實名では差しさわりがあるので、熟考の末「土佐日記」の形で彼の歌論を述べようとしたのではないかと⁶⁾、見解を述べている。

西谷民五郎氏は久松氏のような見解見せているか、多小の異見も見られるのである。氏によれば、土佐日記は歌物語の断片を旅程の進行という横手でまとめあげた、和歌作りのための手引きの書といった性格が濃い。といいながらも、異見として、「古今集」を編纂するのに平假名をもつてし、漢詩に對して和歌を優位におこうとした貫之の自らの據つて立つべき國風文化、そのものであると断言している。⁷⁾また和歌の入門書の體裁をとってはいるがおそらく貫之は、國風文化の確立のために最後の武器として土佐日記を必要としたのではないかと述べている、この西谷説は、多分反ばくされる余地のある見解であると思われる。というのは後述するが、一般論から言えば、貫之がめざしたのは、和歌と漢詩との共存互助の理念の方が強いと感ぜられるのであるからである。

筆者は土佐日記の一側面である和魂漢才からながめる場合、後に日記の個條個條に表われる句題和歌の分析を通じて明らかにしようと思っているが、國風宣揚の見解は取れないのである。

長谷川政春氏は「貫之自身が換骨奪胎し、やがって彼の資料と理念と作歌事とによつて謳吟して行ったのである」⁸⁾と言いながら、さらに“後年の貫之の漢詩に對抗し和歌宣揚に燃えた姿が思われる”⁹⁾と漢詩との對比意識の角度から土佐日記をとらえている。そのことは、長谷川氏の「土佐日記の方法」で漢詩對和歌の對比意識はたいへんに強いものであります”と述べながら、和歌の本質の一面を強く意識している場面で、やはり潜在的に漢詩が對比されているものと考えて”と述べている。また前掲書の氏の「屏風歌作家からの出發」では「漢詩文への關心が人一倍強く」、それだけに彼の文學に強い影響を與えている。貫之は漢詩を残していなくても、彼の漢文學の素養は十分で新撰和歌序の立派な漢文を今傳えている。また彼の和歌宣揚の精神が漢詩文への距離を近づけ、ついに漢詩文は彼の文學の隱然たる基盤にもなったのであると氏は言明しているのである¹⁰⁾

また氏は他でも、貫之が「古今集」の撰者またその實作者として志向したものは、和歌の漢詩に比肩する正統性と自立した〈ことば〉の世界の捏造=〈詩語〉の發見である。そして、〈うた〉から〈和歌〉への接點が歌人貫之の位相であり、散文精神の開發と日記文學の始發が「土佐日記」の位相であった。貫之文學に意識の明解さのみが残る。と自分の立場を、いたるといって強くおし

6) 今井勝「土佐日記形成の軌跡」(解釋と鑑賞 2月號), 至文堂, 1979, p. 197.

7) 西谷民五郎「貫之土佐日記」(口文學解釋と鑑賞 2月號) 至文堂, 1979, p. 180.

8) 長谷川政春「紀貫之論」有精堂, 1984, p. 13.

9) 長谷川政春; 前掲書, p. 15.

10) 長谷川政春; 前掲書, p. 22.

通している¹¹⁾。

その対比意識の立場に立つ者として、石原昭平氏は「土佐日記の場の男と女は登場人物の性別よりも、男の漢詩に対する女の和歌という対比、ないしは唐土と大和という「古今集」序文の筆者にふさわしい意識がある」と述べている¹²⁾

松村誠一氏も「漢詩を出すことは作者らしく見せかけた女性のよく知らないこととして、つとめて避けるようにし、漢詩に対よる和歌の優位性を主張する詩論を、あらゆる場面を利用して示そうとする」と和歌の優位及び國風宣揚の立場で述べている¹³⁾

鈴木知太郎氏も

漢詩に和歌を對峙せしめて、その存在を強く主張しようとする作者の意圖が明らかに看取られると共に優位に置かうとしているかにさえ感じられるのである¹⁴⁾。

と述べながらさらに、つねに和歌の意義を重く見、その地位を漢詩のよに置こうとする貫之の意圖を示すものと考えられるのでありこれはもはや「對照」の域をはるかに超えて、いわば「對決」の線まで進出しているものと言えようという見解を述べている。

以上の讀氏の立場とは違つた角度からとらえようとした小町參昭彦はだいた次のように述べている。つまり、漢詩文的なものを受けとめる和歌の獨自性というものを明らかにする必然がある。句題和歌のような漢語直譯的なものは意外に和歌史の主流にかかわつてくる面が少ないように思われ、和歌的なものを基盤として漢詩文の影響の問題がはじめて和歌史の文脈の中にどっしりと根を下ろすと言つてもよいのであり。和歌的なものの中に漢詩文的なものが取り込まれていく機構を萬葉集以來の和歌史の中に位置づけていく問題はまだ残されているように思われる。と問題を提議しながらもさらに、漢詩文的な印象が和歌の中に吸収され擴散していく過程でもあり、そこで貫之が果たした役割は言葉に対する強い關心を示した歌論の實踐とでもいうべきものであり、古今集の表現の軌範性は貫之によつて確立したといつてもよい¹⁵⁾。と貫之がめざしたものに近づいて述べている。

近藤潤一氏も貫之のめざしたものを正にとらえていることを述べている。氏の主張を要約すると。

- 11) 長谷川政春「戯像志向と意識の明解さ」(日本古典文學史の基礎知識)、有斐閣ブックス、昭和58、p. 102.
- 12) 石原昭平「日記文學における「語り」の問題」(日本文學 vol. 30) 日本文學協會、1981、p. 25.
- 13) 松村誠一「土佐日記、清鈴日記」(校注松村誠一) 小學館、昭和57、p. 14.
- 14) 鈴木知太郎「土佐日記の構成 一特に對照法的 手法について」(平安朝日記1=日本文學研究資料叢書=以下 平安朝日記1とす) 有精堂、昭和57、p. 77.
- 15) 小町谷照彦「表現論の奥から」(口文學解釋と鑑賞 2月號) 至文堂、1979、p. 82.

紀貫之は時代的美意識をとらえ、日本語の美的特色を精練して宮廷的表現様式を賦與した藝匠であったとほめたうえさらに、漢詩的観照と繪畫的美意識の導入による宮廷和歌様式の発想、趣向を織りあげた。と言い、すでに時代の欲求は歌合、嵯峨風歌の盛行を招いて久しい、律令的理想主義に立つ統治理念の空洞化、私権化した専権貴族の権力機構の強大化と歩調を合わせて、一元的な漢風志向文化の内からの轉換が起つている。と氏は時代的狀況をふまえながらさらに、漢詩文、唐繪系、宮廷文化と次元を異にして、私生活の國風藝術化ともいえそうな和歌、倭繪系、生活文化の愛好となつてあらわれてきたので、貫之の日本語の歌に賭けた専門家としての自己定立はこうした時代の文化的欲求によつて擁護されていたので、貫之は、歌謠の傳統を流れる日本語の美的表現に對する規受を、どく自然に自分の詩的風土たらしめていき、さらに「漢詩文の觀念を借りながら、その特性を和歌本然の抒情性に裕解させていく」、作業をしたと氏は述べている¹⁶⁾。

近藤氏が指摘したように、西下經一氏も

「漢文は用語が豊富で、表現技術も進歩しており 自然人事の機能の機微を巧みに寫し得ものであるが。」¹⁷⁾

と述べながら、あけくれの「うちとけごと」を書き現わして、微妙な人間心理の隈々を残りなく寫すためには、生活語や俗語の中からも、自由に形容詞、副詞、動詞を選んで使える仮名文の方が、あるいは便利であつたかもしれない。と指摘して、貫之がめざした漢和の長短を補い、相合する一面を述べている。

こういう貫之の努力について、松村誠一氏は

「文章は和文に漢文訓讀語、變體漢文の要素や四大文に學んだ對句法を意識的に取り入れ、場面に應じて適切は獨特の効果をあけるなど、苦心の跡をみせている」¹⁸⁾

と述べている。さらに松村氏は、岸本由豆流の「土佐日記考證」についての書評で、

「本文は日記の文を小節に區切つて揚げ左右に校合を記し、そのあとに注解を代す。更に詳細な頭注欄を設け、注解に取り上げた語句について、用例、故事等を廣く和漢古今の典籍から豊富に引き、頭注欄には更に先學の説をも加えて、本文欄の先人の注の不足するところを補っている」¹⁹⁾

16) 近藤潤一「言語意識-思想・主題」(口文學解釋と鑑賞 2月號) 至文堂, 1979, p. 66.

17) 西下經一「土佐日記-女流日記の先驅一」(口文學解釋と鑑賞, 日記文學, 1月號) 至文堂, 昭和29, p. 36.

18) 松村誠一「土佐日記」(日本古典文學大辭典第四卷) 岩波書店, 1984, p. 465.

19) 岸本由豆流「土佐日記考證」(松村誠一評: 前掲書, p. 465.

と由豆流が土佐日記に對する慎重さまでをわれわれにうかがわせることを述べている。同じことが、木材正中氏の解説による北材季吟の「土佐日記抄」からもうかがわれる。

「語釋を中心に、和漢の故事、地名などを解説、類例、類歌をも適宜に擧げ、時に文意の要點、前後の照應などにも説き及ぶ」²⁰⁾

とあるように、貫之がめざしたものが決して國風宣揚とか對比意義が比重をおいてなかつたから先人たちもそのいきをそのまま感じとっての態度であると思われるのである。貫之がめざしたものは漢和の融化的なものである。彼が意識するまでは、玉上琢彌が、「漢文體及至准漢文體(わたくしの言う眞名文、漢字ばかり書いてあるが、中國人にも讀めないもの)の日記を、當時の男は書いたけれども…。」²¹⁾と皮肉つているように、漢文傳が勝手きままに書いていたらしいのである。その點、藤岡作太郎も²²⁾

「外邦の文學を鑛案するもの、その文字多くは生硬未熟にして蠟を嚼おか如きに、これには毫もその弊なく、語を疊み句を對して駢儷の體に擬し、文脈句法よく漢文の粹を得て、しかも國文の尺度を出でず、換骨奪胎宜しきに合いて、艶冶流麗、櫻の美と菊の清とを兼たるが如し」。

と他人に對してはこきおろしてから、

「貫之の功は、漢文の法を國文に移して、彼此の融化を試み、無瑕の美玉毫も斧鑿の痕を止めざるなり、而してこの漢和融化的は、貫之の文實にその嚆矢たること、更に記しておかざるべからず」

とほめたうえで「寒中の白玉一輪は枝に亂れし二月の紅梅より價あり」と詩を一首そえているのである。

事實、土佐日記には、漢詩の引用、漢詩朗吟の紹介など、漢詩文の教養にふれた部分が多いのである。引用されている漢詩から見ると、たとえば、送別の人々の踏歌に、李白の詩を思い出し、その詩を踏まえた句題和歌、そして別離の感傷を漢詩と申斐歌に託している。漢詩文と國風との切つても切れない關係を強調するのが貫之の趣意である。決して、西谷氏とか長谷的氏などが言うがごとく漢詩を押えて和歌を賞揚する國粹主義の現われではないのである。貫之がめざしたものは、

20) 北材秀吟「土佐日記抄」(木材正中評)前掲書, p. 467.

21) 玉上琢彌「平安日記と物物との關係交渉」(口文學解釋と鑑賞, 2月號)至文堂, 昭和 36, p. 14.

22) 藤岡作太郎「文章家としての紀貫之」(口文學全集1, 平安朝篇)平凡社, 1980, p. 198.

漢詩と和歌との共存であり、句題和歌の詠法を紹介しながら、詩歌の發想論と文學的感動における超民族、超國家的普通性を論じようと努めたと察せられるのである。

2. 十二月十六日

「からうたは、これにえかかず」²³⁾

「からうた」とは漢詩である、日記の作者が女性という建前をとつているので、送別宴の席で、男たちが漢詩の朗吟のやりとりをやつているのをそばで聞いても、それを理解して、記憶してここに記すことができないと述べている。だが鈴木知太郎²⁴⁾氏は、土佐日記の中で「からうた」に関する記事が、(十二月十六日、十七日、一月十七日、十八日、十日、十七日)が出てくると述べながら、これは「をとこもすなる日記」に對して、「をむなもしてみんとて…」とという土佐日記執筆の意志にも連なり、また「から」に對する「やまと」という國家的な意識や自覺にもかかわりを持ち、さらに貫之の歌道尊重、和歌宣揚の精神をも示すとともに、土佐日記の性格をも規定してゆく一要素として、注目すべきものであらうと慎重に見解を述べているが、貫之は和歌と漢詩とが密接な関係であることにいちやくめざめ、機會あるごとにそのことについてさかんに言及しているが、土佐日記は、作者を女性と仮託している建前であるから、朗吟されている漢詩の内容を紹介することを「からうたはこれにえかかず」と拒否している。これは女性仮託の約束に遠慮して「ききされにきけるなり」と弁解している一月十七日の例とを根據として、貫之は國風宣揚の立場から漢詩漢文に對立的な態度を執るものであるとする意見が行なわれているが、それは全く當を得ないことであると思われるのである。

土佐日記の表層的第一主題を歌論である。事實、貫之は和歌再唱の世に生きた人である。だが彼の和歌振興、歌道鼓吹は、決して漢詩漢文との對立否定の上に存在するものではないのである。國風宣揚の立場で土佐日記をながめると眞の貫之の態度を見失つてしまうのである。和漢對立のものとして見るのは、徳川時代に、儒教、佛教を排斥して、神ながらの道すなわち神道思想を固執した一部の國粹主義者である國字者たちの偏狹な見解の殘滓をそのまま受けついていると思われるのである。

23) 鈴木知太郎外三人 枝注「土佐日記外三篇」(日本古典文學大系) 岩波書店, 1981, p. 28.

24) 鈴木知太郎: 前掲書, p. 62.

土佐日記の該當各條に、いずれも漢詩の吟詠があると必ずこれに對應して、和歌もしくは歌物語りを述べる方法をとつている。しかも漢詩に関しては叙述を簡略にして和歌について多くを語る傾向が強いので、貫之は中國および漢詩に對する日本および和歌の尊重優感を強調したのであると説く論者もあるが、貫之の見識はそのようは狭量なものではないのである。事實、涉谷孝氏によれば。

「和歌を唐詩に對比して和歌の優位性を示そうとした貫之の精神をもう一度検討してみたい、それは、唐詩及び唐風文化の影響を受けながらも絶えず抵抗していた事を意味するのである。貫之が深い漢文學的な知識を持つていた事が土佐日記の文體からも窺われる事は廣く知られている」²⁵⁾

と述べながらさらに、傳統としての和歌の優位性の自覺は、唐風文化の存在を意識する事によってのみ可能であったと、和唐對比的な立場に立っている。

だが竹西寛子には「長いあいだ公然と重用された漢詩が廢止されたわけでもなく、世の中の制度が依然として唐の制度によつて統一されている時代に…」²⁶⁾と述べ、さらに「自國、他國の區別なくまた、時代の新舊を問わず、すぐれた作品に通うことの一つは、作者の中の他人の、作者の私と對等な活用にあると思われる」²⁷⁾と新鮮な見解を述べている。

涉谷氏が一部指摘したように、光孝宇多以降の和歌再唱の道は、管原道眞のような純然たる漢學者によつて切り開かれ、貫之は幼少年期より横益するほどの漢詩文的教養を身につけた人である。

「紀貫之は、紀氏という貴神の家に生を享け、その事蹟から推すならば彼は當時の文化人として最高水準にあつた人物と考えられ、徒つて王朝時代の男性知識人の常として、漢籍に親しみ、自ら詩文を制作することに教養を求め…」²⁸⁾

と述べている、また、川口久雄氏も、貫之のことをつぎのようにほめただえている。

「8世紀、9世紀ともりあがつてきたわが漢文學のエネルギーは貫之の變革的情熱と新しい國語意識とによつて變容して新しい様式の文藝を胎生せしめる原動力となるのであり、そういう態度は貫之の生涯を一貫しているのである」²⁹⁾

25) 涉谷孝「土佐日記における和歌」(平安朝日記1)有精堂 昭和 57, p. 95.

26) 竹西寛子「紀貫之・土佐日記」(日本の旅人2)淡交社 昭和 49, p. 161.

27) 竹西寛子;前掲書, p. 60.

28) 築富裕「土佐日記と漢文訓讀」(平安朝日記1)有精堂 昭和54 p. 119.

29) 川口久雄「土佐日記の成立とその漢文學的地盤」(平安朝日記1)有精堂 昭和 54, p. 97.

と述べながらさらに、延喜以前の宮廷貴族の煩瑣な漢詩文的な文學様式に對して、これを無意味に近いものとして意識し、ある意味から葬り去り、そこから解放して、新しく獲得した女文學——草仮名をつかつて新しい世界をうみ出す産婆役となつた——その點で貫之はやはり時流に先んじた開拓者の明敏さと勇氣とをもち文學變革のリーダーとしての情熱をもつていたと考えざるをえないと述べている³⁰⁾

以上とりよげた貫之の肯定的な部分について裏付けているような論者萩谷朴氏の説を要的に述べるとだいたいつぎのごとくである。

氏によれば、そもそも菅原道眞の和魂の漢才と矛盾對立的なものではなく、唇齒輔車であり、相互に助長する關係で兩立させるものであつた。と述べ、さらに、奈良朝以前の傳統的な和歌と、平安朝初期の進取的な漢詩と、正反交替して來た文學の歴史は、光孝、宇多、醍醐の三朝に和歌再唱の時代を迎えても、それは萬葉的な傳統文藝そのままの復活ではなく、漢詩文的教養の洗練を十分に經驗して、弁證法的展開のよに止揚された新生和歌なのである。外形的には復古維新のための和歌再唱であつても、内面的には漢詩文的教養を吸収消化したものであつたから、決して漢詩と豫仮對立するものとして受けとられてはいなかつたと主張している、

氏はさらに、貫之自身が漢詩文的教養の横益した歌人であり、土佐日記の中には、漢詩の發想と表現とを取り入れた句題和歌がしばしば提示されているのである。故に、漢詩に言及すると必ず和歌に話題を轉じるのは、決して、漢詩を抑えて和歌を推すというよりは、偏狭な國粹意識によるものではなく、むしろ、漢詩と和歌との密接な相互關係を印象づける歌論的主題に基づくものであり、反復學習して十分にその理念を滲透させようとするものである³¹⁾。と貫之の意圖を眞に見つめようとする氏の氣がまえがうかがわれる。そして氏は和魂漢才にふれて。

「和魂漢才は和歌再昌期の男性貴族知識社會における現代的スローガンであつた、土佐日記に漢詩と和歌とが常に共存し、句題和歌の詠法が最も頻繁に紹介され、文藝の世界における日本とツナとの一體感を説くのはそのためである、外來文化を抑えて國風を宣揚するといった國學者流の狹隘な解釋は成り立たない。³²⁾」

ときっぱり結論づけている。樋口寛氏は、この日の「からうたはこれにえかかず」を中心にだいた次のように自分の見解を述べている。それは、海上に出はじめてからは、公務上の記事を離れて、

30) 川口久雄：前掲書，p. 102.

31) 萩谷朴「土佐日記全注譯」角川書店，昭和 57，p. 89.

32) 萩谷朴：前掲書，p. 48.

旅そのものからくる濠情的色彩も強められ、やがてそれは彼の得意とする和歌的觀照眼の獨壇場と變り、その和歌のおのづからの發生、詠出に恵まれた情況というものの魅力にひかれて、和歌的記事をその中心とする様になつたと想像されると言ひさらに、おそらく初期になつた覺書的なものを再度和歌的なものを中心として、それに平素から目の持つてゐる歌論的なものを持ち込んで再編輯しようと思ひつゝにいたり、その時「からうたはこれにえかかず」と記している如く、和歌を中心として、和歌の詠出法その他を、より効果的に示すための再編輯を思ひ立つにあつて初めて自己の分身をかまえる必要を感じた、そしてその間にあつても作者の筆を動かしてゐたものは旅行中の和歌のよき題材、古歌への回想、またはみやこへのあこがれであつたと述べさらに、この日記にはもつぱら和歌のみをのせたいと考えであり。しかもそれは漢文學への對抗の氣が、その根柢をなしてゐたと考えられるにもかかわらず、その對象なるがためではあるが漢詩をしきりに氣にかけており、その排撃はかえて原據を豫想させ、排撃しようとするほどその原據はまたそれだけ大きく現わされるにいたつた。しかも漢文學に對して反對的態度をとつて和歌を示そうとした彼の説く和歌の優秀性は、多くいわゆる古今的な觀照法に終つてゐるのであつて、それは實のところは全く漢文學から絶縁されたものではなく、それどころか、これはむしろ漢語文的なものの裏付けをうけているものなのであつた。

そして、貫之が漢文學に對してあえて優位におこうとした「やまとうた」に關する彼の主張は、じつは、漢文學から助けられてゐるものであつたということを理解することが出来るものであると説明しているのである³³⁾。

樋口氏のことに對して、萩谷朴氏は、土佐日記を「あそび」の文學として「如何に作つたか」について論じた「土佐日記における貫之の立場」に於ける樋口氏の一般見解をとりあげて樋口氏の洞察に深い敬意を表さねばならないとほめただえている。

ところが、多くのものが土佐日記について、名文非名文を論議したり、さらに文章家としての力働をけなしたりすることは、度を過ぎたことであり、貫之ならびに土佐日記にとつて迷惑至極なものであつたといわれなければならない³⁴⁾と注意している。筆者もおそろおそろ土佐日記に接している初門者なので、萩谷氏の注意を素直に受けとるつもりである。

(3) 十二月十七日

“さをさせどもそこひもしらぬふかきころをきみにみるかな”³⁵⁾

33) 樋口寛「土佐日記における貫之の立場」(平安朝日記1) 有精堂 昭和 54, p. 46.

34) 萩谷朴「土佐日記は歌論書か」(平安朝日記1) 有精堂 昭和 54, p. 54.

35) 鈴木知太郎外三人校注;前掲書, p. 30.

この歌は、見送りに来ている人々が、それぞれ手を取り會って別れのせつなさを語りあつて、人々が多勢がかりでやっと一首つくつて詠んだ歌「おなごり借しいと思う方がもしや、行かずに留まつてはくださらないかと思つて、私どもは、こんなに多勢、連れだつて、おひきとめに來たのですよ」と言つたので、たいへん感心して、旅立つ人が詠んだものでその意味は、「棹をさすけれども、測り知れないほど深い大海。ちょうど、そのように深い御厚意を、あなたから感じ取ることですよ」と言つたものである。

この歌は、李白の詩「贈汪倫」の

李白乗舟將欲行 忽聞岸上踏歌聲 桃花潭水深千尺 不及汪倫送我情³⁶⁾

の下二句を踏まえた句題和歌中の一例である。李白の詩が、桃花潭の水深を千尺と限定し、汪倫の友情をそれにまさるものと對比しているのに對し、貫之が詠んだ和歌の方は、海の深さを無限なものとし、友情をその無限の深さと歸一にしている。ここに見える貫之の意気こみを見る場合。どこかに李白の詩を超えようとする意識が伺っているように思われるのである。人見ト幽の「土佐日記附註」³⁷⁾は、「さをさせど」の一首の典拠として李白の詩の下二句を引くと共に、ある説に「續古今集」忠岑の歌に「深けれど千尋の海も底知りぬ人の心棹もおよばぬ」とあるのに非常に似ていると「惑説」を紹介しているが、これは當を得ない見解であると思われるのである。それというのは、李白の詩の上二句に見る踏歌の緣由で、貫之が、この忠岑の歌を唯一の本歌としているのではなく、むしろ、李白の原詩から直接に發想している上に、忠岑の歌が、李白の詩をそのまま単純な直喩表現として引用していることを批判し、超越しようとする意味で、貫之が意識して隱喩表現を用いたとしたら、それこそ句題和歌とは、いかに詠作すべきであるかという規範を示そうとする歌論的な意圖があつたのではないかと察せられるのである。この見解を裏づけられることとして、實際に、李白の同じ詩を踏まえた貫之の舊作の歌に「棹させど深さも知らぬ藤（淵）なれば色をば人も知らじとぞ思ふ」（後撰集卷三、127）に見えるのである。ゆえに、いまさら、忠岑にならう程度ではなかつたのである、おしろ忠岑をのり越えていると見るのが妥當である。

この十七日條のなかばから、この土佐日記の第一主題とも言える初心者向けの和歌文學に對する概論といえる叙述がいよいよ表面化している。この日の歌論の提示は、大きくわけて、句題和歌と返し歌の作法という狹義の歌論に屬するものと、踏歌と甲斐歌という廣義の歌論に屬するものとの二つに分類することができるのである。

36) 日榮社編輯「漢詩」日榮社、昭和54、p. 175.

37) 人見ト幽「土佐日記附註」（増補口語口大學研究史大成6、平安日記）三省堂、昭和53、p. 31

この十七日條の返し歌「さをさせど」の一首が、李白「贈汪倫」の詩を本文³⁸⁾として取った句題和歌である。この李白の詩にある深さ千尺の桃花潭を。當時の常識では水深無限と考えられた海に置きかえ、桃花深よりもさらに深いと對比関係におかれた友情を、水深無限の海と歸一させたところに、句題和歌としての順承に従って發展させる作法を示しているのである。そして上の二句の「李白舟に乗つて將に行かおとするや、忽ちに開く岸上の踏歌の聲」という汪倫送別の情景が、そのまま、鹿兒の崎における踏歌送別の實況にあてはまるのである。

踏歌は「舊唐書」に「袂を連ねて踏歌し百寮を縦まます」とあるごとく、人々が列をつくつて足を踏みながら、調子を揃えて歌い練り歩くことを言うが、これが日本に入つて、傳統的な歌垣の習俗との近似性から容易に受け入れてはやるようになったのである。後には儀式化されて、正月14日の男踏歌、16日の女踏歌として、宮中の節會行事となったほどである。

男踏歌には元來、漢詩を歌唱するのが定めであったが、後には催馬樂の歌曲を用いるようになった。従って正式の踏歌ではなくとも、行列して足踏み調子をとって、和歌、歌謠を姿態を廣義的に踏歌と見なしている方である。

貫之は漁師たちが網を擔ぎ出しなから、あるいは網をひきながら。また網を箒き收めつつ、勞働歌を合唱するそのさまにも似て、貫之を送る人々が、浜邊に一列に並んで、足踏み調子をとりに口をそろえて「をしとおもふ」の一首を合唱するさまに踏歌を連想し、同時に李白の「忽ちに開く岸上踏歌の聲」の句を思い出し、即座にその下二句を用いて、返し歌を作つたと思われるのである。

返し歌は、相對の歌の歌意、表現を應用するばかりではなく、相對の和歌の發展、贈呈の方法に因縁づけて作るのである。貫之はこの方法によつて、送別の人々の合唱するさまを踏歌と見立て、踏歌の縁によつて、李白の詩を上下に分けて、上の句を彼のものとし、下の句をわがものとして返し歌を作っているのである。こういうふうを送別の人々の踏歌に李白の詩を思い出して、その詩を踏まえた句題和歌、そして別離の感傷を漢詩と甲斐歌に託しているのをみると、貫之が強く主張しているのがおのずと分かつてくる。それは漢詩と和詩との共存互助の理念であると思われるのである。漢詩文と國風との切っても切れない關係を強調するのが貫之の趣意であつて、決して通説にいうがごとく、漢詩を押えて和歌を賞揚する偏狹な國粹主義の現われではないのである。

貫之および當時における和歌再唱の本流は單なる傳統復歸ではなく、漢詩文的教養を培養の基として止揚された形での發展であつたからである。菅原道眞のいう和魂漢才がこれであつて、土佐日記の當初讀者である年少男子にも、當時の社交場の中においてつねに漢詩と和歌とが共存する實情

38) 本文(ホンモン) ① 古書などの典故との據るべき文句、② 文書、書物の主になる文など。

を紹介して、和漢兩様の教養をつまさせることが必要であると貫之は考えていたわけであろうと察せられるのである。

この十七日條に、もう一つの句題和歌が見える。

「かくうたふに、ふなやかたのちりもちり。そらゆくももただよひとそいふなる」³⁹⁾

「この咽にかかつちやね、船屋形の塵だつて舞ひあがるし、空を行く雲だつてふらふらと足を止めらあ」⁴⁰⁾、この調子からみると、非常に作者が漢籍の故事に通曉していることとなつて女性仮託の立場と矛盾するということがうかがわれるから、眞の作者は貫之であるか無理もないことであろうが、次の機会でもこういう例について述べるつもりである。というのは、後に出てくる句題和歌にもちよこちよこと作者みづからの顔を出しているからである。

「船屋形の塵も散り」とは、聲音の素暗らしさに船の屋形の塵も共鳴して落ちてくるという大袈裟な自讃のことばであるが、これは漢籍の「梁の塵を動かす」ということばを引用して、船の中でのびったりしている言い換えた秀句と言えるのである。漢籍の故事は「文撰」卷十八成公子女「嘯賦」の中で。

「劉向別錄」文選李喜註所引・卷十八嘯賦=7、劉向別錄曰、有人歌賦。楚漢興以來、善雅歌者魯人虞公。發聲清哀、遠動梁塵。其世學者莫能及」⁴¹⁾

とあり、日本ではすでに8世紀半の「懷風藻」に「梁上以歌塵」（文武天皇五詠雪一首）と、「歌聲落梁塵」（石川石足五言春苑應詔一首）などの引用がある。

つづく「空行く雲もただよひ」とは、歌聲が無心に空を流れる雲をも感動させてひととどめるというのである。これ漢籍からの引用である。「列子」湯問篇に」

薛潭學謳於秦青、未窮青之技、自謂盡之、遂辭歸。秦青弗止。饒於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲。薛潭乃謝求反、終身不敢言辭。⁴²⁾

とあり、「懷風藻」にも「雕雲遏響」と引用されている。鈴木知太郎氏は支那故事の「青哀蓋動

39) 鈴木知太郎外三人校注：前掲書、p. 30.

40) 小西基一「土佐日記評解」有精堂 昭 54, p. 65 の解釋から引用.

41) 萩谷朴 前掲書、p. 562.

42) 奥平卓外一人譯「老子・列子」(中國の思想6) 徳用書店、昭和 42, p. 233.

深塵」をば、船中なので、當意即抄に、「ふなやかたのちりもちり」と言い變えたものであろう」と述べながらさらに、萩谷朴氏と全く同じ見解であり、かように漢籍や日本の詩集などからの知識によつて、當時すぐれた歌聲とか音楽か樂塵を動かしたり、行く雲を止めたり、することは一般に知られていたので、貫之もそうしたことを素地とし、この兩者を巧みに綴り合せて、ここに一文をあやなしたものである⁴³⁾ うと言いながらも、「すべてがよくこれを操り嗜む由を述べているのであつて、後に見える漢詩、和歌共通の發想論と共に、傳統においても、文藝における意義、價值などにおいても、いづれも漢詩に對して一步も譲るところのない旨を主張しているかに看取せられる」⁴⁴⁾ と獨自的は見解を述べさらに、漢詩に對決する和歌意識を底において、と貫之の意圖を對決的にとらえている見解を述べている。

臼田甚五郎氏は、二十七日條について、の説明で、甲斐 嶺を見ようとする者にとつて横たわるさわの中⁴⁵⁾ 山ではないけれども、別れを借しむ人々をせき立てて出帆させる楫取はまるでさやの中山のように間に邪魔立てをする憎らしい者という感じがびつたり合っている。こういうすばらしい思いつきをしたある人は貫之である。しかもそれをぬけと自慢しているから面白いと言いながらさらに、故事を引いての老人の歌聲、その邊が天衣天縫で、貫之翁の眞價を發揮したところで憎めないと思うと述べている。臼田氏は對比とか對決などの差別を離れて、純粹文學作品としてすなおに味わおうとする態度に敬意を拂うものである。

萩谷朴氏の見解を要的に述べると。和歌および歌謠に關する作法、知識の紹介が、きわめて立體的な戯曲的な手法で効果を出している。と述べさらに、舟邊に設けた送別宴の座に相對する貫之一行と國司の兄弟たち、借別の辭がこもごもかわされるとおもむろにたちあがった送別の人々が一例にならんで、足踏み手拍子を取りながら合唱しながら練り歩く。それが終わると、貫之が一起つて返し歌を朗吟する。送る人送られる人、海と陸とが呼應しての幕切れの大合唱、波音を伴奏に、余韻を残しながら詩吟と甲斐歌の哀切な調べとなるのである。こうして高まつた緊張、萬感胸に迫る別れの感傷を解きはぐすのが、「船屋形の塵も散り、空行く雲も様ひぬ」というわれ寝めの戯言である。そして緩急たがいによろしきをえたテンポ、人物の動き、音響効果、場面の轉換か快いリズムに乗つて流れる。土佐日記における歌論はこのように具體的な實感を伴って演出され展開としてゆくので⁴⁶⁾ ある。と述べている。氏はまさに土佐日記の權威者らしく、土佐日記を純粹にながめ。

43) 鈴木知太郎外三人校注;前掲書, p. 64.

44) 鈴木知太郎外三人校注「平安朝日記1」有精堂 昭和57, p. 77.

45) 臼田甚五郎「土佐日記」(鑑賞日本古錢文學第10卷・王朝日記) 角川書店, 昭和 52, p. 39.

46) 萩谷朴:前掲書, p. 106.

そこに表われる場面とか詩によって、氏の胸裡に再構成にしながら、もう一度鑑賞を通して、作者貫之になつて、土佐日記の中に溶解していつているように筆者には思われるのである。

そして、萩谷氏は張調するのである

「貫之が強く主張したかつたことは、和歌と漢詩との共存互助の理念である。送別の人々の贈歌に李白の詩を思い出し、その詩を踏まえた句題和歌、そして別離の感傷を漢詩と甲斐歌に託する。…漢詩文と國風との切つても切れない関係を強調するのか貫之の趣意であつて、決して、通説にいうかごとく、漢詩を押えて和歌を賞揚する偏狭な國粹主義の見われではない」⁴⁷⁾

と、土佐日記に對して、國粹主義者に國學者らに反ばく、初學者たちにはいましめているのである。事實、貫之及び當時における和歌再唱の本流は、單なる傳統復歸ではなく、漢詩文的教養を培養する目的として止揚された形での發展であつたからである。菅原道眞のいう和魂漢才がこれであつて、土佐日記の當初の讀者である年少男子にも、當時の社交場においても、つねに漢詩と和歌とが共存する實情を紹介して、和漢兩様の教養を積ませることが必要であると貫之は考えそれを打開しようとめざしたものである。

Ⅲ. 結 論

土佐日記は、表層的には歌論的主題を主軸にしながら、中層的には諷刺的な主題、そして自照的は主題を最も深層にひそませて日記文學という新様式を創始していると考えられるのである。そして仮名文の日記文學をも創始して、それまでの歌が主で、文は縦的であつた歌物語から脱皮して、散文本位の寫實性のある人間像を描いている。特に心理分析や描寫は、それまでにないものである。また仮名散文による人間の全體性と生活描寫、心情表現を可能にしている點など、後續の日本文學の先驅的な意義は大きいと言えるのである。

本橋では、この日記の表層的な第一主題の歌論展開を考察したが、それも純粹は和歌論はまたにして、先づ目につく、和魂漢才的な句題和歌を中心に考察するにとどまつたのである。この和魂漢才にふれた部分が約9日條にもものぼるのである。筆者は長い年月をあげて、調べまとめるうちに分量が、小橋にはとてもおさめ切れるものではないと思つて、2回分に分けて述べることにしたのである。

47) 前掲書, p. 107.

① 作者のめざしたものはなにかを問い、後學の年少讀者らに、漢詩文的教養を身につけて、漢詩と和歌との共存をはかつてのことであつて、決して、和歌優先ではないことを暗示している。

② 十二月十六日條では、「からうた」「やまと擧げて、二兩の對立、對抗そして排撃的意識がないことはもちろん、和歌優位ではなく、密接な相互關係を印象づける歌論的主題に基づいていると考えられたのである。

③ 十二月二十七日條では、初めて、漢詩とか漢籍を引いて、句題和歌の實例を示している。李白の詩などをそのまま単純な直喩表現として引用していることを批判し、超越しようとする意味で貫之の意識して隱喩表現を用いて、句題和歌とは、いかに詠作すべきであるかという規範を示そうとする歌論的意圖が察せられたのである。

これらは、引用されている漢詩から、つまり、送別の踏歌に、李白の詩を思い出し、その詩を踏えた句題和歌、そして別れの感傷を漢詩と日本の甲斐歌に託して、詠ずなど、漢詩文と日本國風との切つても切れない關係を強調する作者の趣意が察せられたのである。

結論的に言うと、貫之の句題和歌を詠ずる心境は、一般的、普通的な詩歌發想論と結びつけて高度な文藝理論に發展させながら、それを唐に、和に分けない精神、つまり國境とか民族とかの狭苦しい垣根をとりはらつての超越した世界的な展望にまで擴大することによつて土佐日記における和魂漢才的歌論の叙述を年少讀者に經驗させるという意圖が察せられるのである。

故に漢詩を押えて和歌を賞揚しようとしているという土佐日記觀の一部の日本國粹主義國學者たちの偏狹な理論は間違つて、いと考察されるのである。そして蛇足ではあるが、貫之翁はあの世で、自分を間違つて述べる者に對して“まだだ”“まだだ”と嘲ているような氣がするのはどうしてであらうか。

國文抄錄

土佐日記의 歌論性에 대해서

— 和魂漢才을 中心으로 —

姜 泰 國

土佐日記의 表層的 主題인 歌論中에서 漢詩나 漢籍을 引用해서 和歌를 만드는 教養入門書籍인 面을 中心으로 考察하여 보았다.

作者 貫之의 意圖을 正視하려 하지않은 日本의 一部 國粹主義者의인 視覺에서 보려는 立場과 작품 자체를 순수하게 받아들여려는 立場을 상반되는 차이점과 유사점등을 통해서, 필자는 필자 나름대로 작품과 대면 하면서 종합적으로 검토 분석해 보았다.

千年前 日本의 平安時代, 그 당시는 漢文的인 지식과 교양이 사교장에서 공공연하게 사용되고 있었기 때문에, 漢時와 和歌의 共存性과 漢詩를 통해서 和歌의 깊음을 더해야 된다는 점을 작자는 암시적으로 表現하고 있음을 알 수 있었다.

그런 作者의 意圖을 알고도 모른척 하거나, 혹은 확대 해석해서 和歌의 우월성을 나타내고 있다고 주장하는 國粹主義 學者들의 왜곡된 해석도 고찰해 보았다.

그러나 引用된 原詩나 本文 등을 비교하면서 음미해 나가면 一部 그들의 主張이 터무니 없다는 것을 밝힐 수 있었다.

이 작품을 통해서도, 일부 물지각한 日本人들의 과대망상증과 편협함 그리고 강한 국수주의자들이 아직도 버티고 있음을 엿볼 수 있다.

和魂漢才란 日本國有의 精神과 中國의 學問을 융합함을 말한다. 고로 日本固有의 정신을 갖고 中國에서 건너간 學問을 活用하여야 된다는 그 重要性을 강조하는 風潮이다.

이런 和魂漢才의인 것이 이 日記에는 9個日에 각각 나타나고 있다. 필자는 이를 모두 정리하다 보니 分量이 많아서 본고에서는 그 一部만을 거론하고, 그 一部는 가까운 時日에 再考하여 論하려고 한다.